総合都市研究　第45号　1992

1990年度　東京都立大学都市研究センター公開講演会

大都市高齢社会の問題－パリ；東京

1990年12月11日
場所：中央大学駿河台記念館

1. 開会挨拶・司会　　針　生　誠　吉*
2. 大都市パリと高齢化社会　　フランソワーズ・クリビエ**
Les retraité du Grand Paris　　（通訳　井　田　進　也***）
3. 東京の社会変動と高齢者のライフスタイル　　倉　沢　　進****

1. 開会挨拶（針生　誠吉）

皆様どうもお待たせいたしました。ただいまから東京都立大学都市研究センターの第3回の公開講演会を、「大都市高齢社会の問題－パリ；東京－」というテーマで始めさせていただきます。

私は法学部の針生でございます。

今日はパリからお客様をお招きした公開講座でございますが、総長が用事でご出席になれないというので、急遽司会の私が兼ねて開会のごあいさつを申し上げます。

大都市高齢化社会の問題をパリ、東京というふうに比較して考察するというのが今日のテーマです。今日お招きしましたパリのフランソワーズ・クリビエさんは、地理学がご専門の研究者でいらっしゃいますが、パリというのは世界最古の高齢化社会であり、また世界の文化の中心地でもあり、人権とか人間の尊厳などという点では東京とは格段の先進国です。倉沢先生がとりあげられるのは幕藩体制以来の大江戸、盛り場文化という独特のライフスタイルをもってまいりました東京、そして今日国際化の時代になりまして国際文化の中心都市を形成しなければならない東京都、そして急激な高齢化社会の進展している東京です。このようなパリと東京の高齢化社会の文化というものを比較することは、大変興味ある課題のように思われます。

先ほど私丸善に行ってみましたら、高齢化社会の新しい本だけで十数冊ぐらい並んでいました。一種の流行現象になっていますけれども、実際には本格的に高齢化社会を研究することはそう進んでいるわけではありません。そういう中で今日のこのご報告は二つとも非常にアカデミックな、水準の高いご報告になろうと思われます。

東京都立大学は都市研究センターという研究所をもっておりまして、1988年から「大都市高齢社

* 東京都立大学都市研究センター・法学部
** パリ大学教授
*** 東京都立大学人文学部
**** 東京都立大学都市研究センター所長・人文学部
（所属は、公開講演会開催当時）

会の問題状況と政策課題」の総合研究をやっております。また国際共同研究を重視しまして、外国の教授をお招きし研究をすることも進めようとしております。その第1号としてクリビエ先生においでいただいたわけでございます。

今日は講演会だけで質疑討論はありませんけれども、また12月13日に都立大学で同じような研究会を開き、討論を充分行いますので、今日はお二人のご報告をご清聴いただきたいと存じます。

講師の紹介のところに経歴がございますように、クリビエ先生は地理学がご専攻で、フランスでは高名な高齢化社会の研究者であると同時に、日本の高齢化のご研究もあります。まず最初にクリビエさんからご報告いただきます。なお、都立大学の人文学部仏文の井田教授が今日のご報告を通訳していただけることになっております。

どうぞよろしくお願いいたします。

2. 大都市パリと高齢化社会
(Les retraile du Grand Paris)

フランソワーズ・クリビエ
(通訳　　井田　進也)

本日は、お招きいただきましてまことにありがとうございました。

今日のテーマは大変興味ある、かつ重要なテーマでございます。私の国フランスは、19世紀に最初に年老いた国、皆様の国日本は、今日一番早く年老いつつある国です。

まず歴史的な懐古をいたします。寿命の伸びについてですが、フランスは近代国家のうちでは最初に「死」が遠のいた国、寿命が伸びた国です。そして老人の比率が高くなった国です。18世紀の後半、1790年から1880年にかけて子供の死亡率が下がり、その後成人の死亡率も下がりました。

フランスの年令構成は非常に早くから変化していまして、1871年から大人および高齢者の年令が日本の1955年ごろと同じくらい高くなっています。老齢化は死亡率の低下、出生率の低下によるものです。しかし、私がここで主張したいのは寿命が伸びたことです。我々の人生の経験を変えたのは、年代の感覚、時間の感覚ということです。
今日では余命が非常に増大しつつあります。85歳の人は毎年3カ月ずつ寿命が伸びています。

昔は成人と年老いた両親との間に摩擦、衝突がたくさんありました。というのは、子供たちが父親にとってかわる必要があったからです。今日では家族内の団結がもっと緊密になっています。ところが今度は、世代間の競争が厳しくなってきました。労働市場において競争しなければなりません。また住宅事情、住宅市場においても競争しなければなりません。というわけで、しばらく前から30～40代の方々は退職者の年金が少し多すぎるのではないかと言い出しました。

最近では時間の観念が変わってきました。昔の時間というのは運命の時間でした。昔はいつ死ぬかわかりませんでした。運命によって定められていたわけです。子供の死亡率が下がったので、死ぬ危険が人生の後方へだんだん追いやられていきました。17世紀の前半には、死ぬ人の半分は幼児でした。ところが去年死んだ人のちょうど半分が75歳以上でした。ですから生活自体が変わってきているわけです。19、20世紀の人達は、自分の生活を設計し始めました。近代経済が確立すると、人々は自分の人生設計、仕事や住居などの設計を始めました。

今お話ししたのは二つの時間の感覚ですが、次に第3の時間の感覚というものが出てきました。人々は時間がどんどん逃げ去っていく、なくなっていくということを非常に強く感じるようになっています。最近では、社会が時間というものを拒んでいるのではないかという印象を受けます。

三つの時間ということを申しましたが、これは徐々に順を追ってあらわれてきます。高齢の方々は、その三つの時代、というか時間を同時に生きています。高齢の方々は昔の19世紀的な運命としての時間を生きて、自分の人生の意味を考えてい

ます。そして時間を自分で組織し、計画するように努めています。

日本では高齢の方々は大変威信をもっている、尊敬されていると思われています。フランスでもかつてはお年寄りが非常に尊敬されていましたが、今はそうではないと申します。アメリカでもイギリスでもフランスでも、老人に対する敬意が失われたのは、国が工業化、産業化した結果だと言われています。私は、それは完全な間違いでイデオロギー的な考え方だと思います。

イギリスの歴史家フィリップ・アリエスの説によると、中世以来、近代においてもフランスの老人に対する敬意、というか老人の威信というものは、そんなに高くはなかったということです。18世紀の啓蒙時代には老人に対するある種の敬意、尊敬があらわれました。先ほど申しました啓蒙時代というのは1760年代、70年代ぐらいですが、18世紀、それから19世紀前半、さらには1950年ごろまで、老人に対する敬意というのは惨たんたるものでした。

通説とは違って、私は今こそ老人に対する敬意が改善されてきたと思います。というのは退職者たちが以前に比べて豊かであり、余裕があり、教育があり、住居などの条件もよいことによると思います。30年以来、退職者の生活水準は非常に向上しています。今日では退職者、特に若い退職者たちは、人生というものは非常によいものだと考えています。人生は退職してから始まる、それからが価値があるのだと考えています。まだ人格的な発展を遂げているうちに退職をし、仕事を終えた後で、これから先に人格的な発展があると考えているのです。

日本、フランスを含めた20ほどの先進国では、一人の人間に成年、壮年それから老年ではなくて元気な老年といったらいいかと思いますが第三年代というものが始まりつつあります。

今日では、社会学の方が社会よりも非常に遅れていると思います。社会学者は、今までとは違った人生の段階があると考えています。子供が親元を去るのが一つの段階、夫婦が相手を失う時期、それから非常に高齢になって人の世話にならなければならない、といういくつかの段階があります。そういうわけで最近では、市井の普通の人たちが、退職者と老人をはっきり分けるようになりました。最近の変化としては、ポジティブな変化とネガティブな変化があります。最近では、退職後10～15年、退職後初期というのはまだ壮年時代の延長と見られています。ところが、これはネガティブな面ですけれども、本当の老いというものが、まだかつてないくらいに、我々から遠ざかってしまいました。いま生きている人々の大部分は、途中で死ぬことなく人生のおしまいまでを経験します。これはかつてなかったことです。人類何百万年の歴史のうちでいかなる国、いかなる時代にも、かつてこのようなことはありませんでした。この現象はつい最近に現れたもので、社会思想家もこのような事態が到来しようとは夢にも思いませんでした。18世紀以来、ルソー、マルクス、フロイトなどの大思想家たちもそんなに長生きはしませんでした。これからは我々の社会が決して若くない、年老いた社会になるということは必定です。

こうした状況は三つの条件から成り立っていると思います。まず寿命が非常に延びたということ。第二に、いまだかつてないことですけれども、国民生産、国民の移動が非常に増大したこと。第三に、我々老人観が変わって、老いというもの、高齢化というものを人生の続きとして、人生をさらに発展させるものと考えるようになったことです。

最近心理学者が発見したこと、再発見したといってもいいと思いますが、それは、自分が自分であるためには常に変わっていかなければならない、というパラドックスです。それにはまず生活水準が向上したこと、寿命が延びたこと、それから文化・教養水準が上がったことの三つの条件を挙げることができます。

イギリスの歴史学者ラスレットが、25歳の人のうちどれくらいの人が70歳まで生きられるかということを計算してみました。1880年生まれで1905年に25歳の人たちのうち1950年に70歳まで存命している割合は男性で10人中の5人、女性で10人中7人です。もう少し若い世代、1910年生まれで1935年に25歳の人が、70歳まで存命している割

合は、男性が3人に2人、女性が10人に8人でした。これはフランスの数字ですが、イギリスもほぼ同じです。この数字に日本が達したのは1970年です。日本が西欧社会に追いつくのは非常に早かったということです。

長い前置きになってしまいましたが、今日的な状況をご理解いただくために歴史的な回顧をしたわけです。

つい最近のことですけれども、人々はこのような変化を理解するようになり、それを自分の生活に取り入れるようになってきました。

これからまずパリとその郊外における退職者の住宅条件についてお話ししたいと思います。パリの特殊事情というのは、生活水準はほかの地域よりも15％ほど高いのに、住居条件は他の諸都市よりも古く、そしてもちろん住居費が高く、また人口密度が高いということです。そして住宅の改善がだいぶ遅くなりました。

第一、第二次大戦の間に、衣食住と教育の大きな変化がありました。その中で特に住宅問題だけが非常に立ち遅れまして、労働運動などで住宅改善の要求がなされませんでした。第二次大戦後、住宅状況が非常に悪いということが労働運動の一つの課題になりました。そして1950年代になってようやく、近代的なタイプの住宅が建設されるようになったのです。それからフランスの購買力が25年間にわたって3～4％ずつふえてきました。それで住居をたくさんつくる、古い建物を改善する、ということが大いに行われるようになってきました。

1950～1970年の一番大きな変化というのは、住宅の面積がふえたこと、それから質が向上したということです。パリ地域では1950年代、想像を絶することですが、半分の住宅の中にトイレがありませんでした。今日では5％です。

というわけでお年寄りは、かつてこんなよい住宅条件はなかった、エレベーターはあるし、トイレも中にあるし、住宅は広いし、と思うようになりました。

1908年ごろに生まれた人と1921年前後に生まれた人との二つの世代を比べてみると、お年寄りの方の世代は非常に悪い住宅条件の中で住んでいるように思われます。1988年に80歳と67歳の二つの世代についてアンケートをしました。1921年生まれの67歳の世代は、退職したときはよい住宅に入れました。住宅の面積は25％アップしています。

この二つの世代を比較すると、住宅のいろいろな設備その他に大変な相違があり、非常に大きな社会的相違があります。もちろん低所得者層、低社会層では住宅条件が非常に劣悪です。しかし公共住宅に入っている人たちの場合は、設備がよくなっています。一方私営住宅では、家賃が政府によってコントロールされているところに住んでいる人たちは、便利な気に入った環境に住んでいます。この二つの世代の人たちも二、三十年前に比べるとずっといい条件で生活していますし、若いころに比べると全然比較になりません。

1980年代に80歳の人は、1950年に40歳だったときに電話をもっていた人は10％でした。その人たちが退職したときの電話保有率は40％、80歳になったときは90％の人がもっていました。80歳になってもよくない住宅に住んでいる人たちは一生そうでした。

また、この人たちが退職した1972年以来、住宅条件が改善されました。つまりこの人たちが退職してからアンケートまでの16年間に、半分の人たちが住居をかえています。田舎へ引退した人たちが33％、それから17％の人たちはパリ地区のどこかよその場所へ移っています。こういう住居の変化は、ほとんどすべての場合強制されないで、自らの意思で行ったものです。地方に移った人というのは、やはり田舎に生まれて田舎に戻った人です。日本でもそうでしょうけれども、地方は家賃が低く、住宅が安い。住居条件が快適であるということです。

パリ地域では、退職者のために住宅条件の改善が行われました。特に高齢者を施設に入れないで自宅にとどめておくようになりました。

住宅に関しては、フランスではウェル・フェアー・ステイツ（福祉国家）になりました。フランスでは40％の人たちが持ち家、60％が借家に住んでいますが、公共住宅も民営住宅も家賃がコントロー

ルされています。ですから借家人が追い出されるというのはあり得ません。借家人がよそに住んでいるほかの人と借家を交換しても、持ち主がそれを妨げることはできません。また、あるご婦人が夫に先立たれて家賃が払えなくなった場合には、政府あるいは地方公共団体が60％までもちます。このように社会制度がしっかりしてきましたので、お年寄りの方々は自宅にいられるようになりました。それで家を借りている人も持っている人も、安心して生活できるわけです。ですから、そういう人たちが家を出なければならないというのは、お金の問題ではなくて健康の問題です。10人のうち9人のお年寄りは住宅に満足しています。アンケートをしてみて私は少しも驚きませんでした。

ところが25歳の学生にアンケートをとらせてみると、それはびっくりしました。どうしてあのお年寄りは満足していられるのだろうと、学生たちは驚いたのです。「あなた方は昔の住宅というものがわかっていないのです」と学生に言ってあげました。あまりに社会変化が激しいので、若い学生にはわからないのです。

たいていの人たちは家を変わりたがりません。なぜかというと、住んでいる街、区域に愛着があるからです。家を変えたいという人は、たとえばエレベーターがないような昔ながらの古い住宅に住んでいて、もう上がり下りができなくなった、というような一人暮らしの身寄りのないご婦人です。お年寄りにとって問題なのは、住宅そのものよりもむしろ、周りが危険だとか騒音がひどいなど、環境の劣悪化です。

アルジェリア人や北アフリカ出身の人たちは、今日では失業者が大変多く、その子弟、特に男の子たちに犯罪が多いのですが、こういう人たちが多い地域に住んでいる貧しく年老いた人たちには、特に北アフリカ出身の人たちを対象にした外国人嫌いの傾向があります。お年寄りたち、年取った労働者や昔のお手伝いさんたちは、北アフリカ出身の人たち、失業している人たちなど、あの人たちのおかげで自分たちが苦しめられているのだと言ったりします。というわけで、今フランスの右翼がこういう外国嫌いを大いに利用しようとしていますが、これは実際の状況とは全く異なります。

これから大急ぎで、はるかによい住宅環境に住んでいる若い世代について話します。最初の世代が1972年に退職した人たち、第2世代が84年に退職した人たちです。この14年の間に、若い人たちの収入は25％アップしています。そして住居面積は32％アップです。非常に短い間ながらその相違点は非常に多いことがわかります。トイレは、古い世代では42％しかなかったのが、若い世代では90％になっています。若い世代はその住宅にもう満足できません。人々の要求が前より高くなっていたわけです。

地方に行く人たちでも、いま住んでいる家が悪いから行くという人はいません。いま田舎に行く人たちは、パリでもよい住宅環境に住んでいて、好きで田舎に、前よりももっと積極的な意図をもって田舎に行く人たちです。

都市の変化というのは老人にはよくないことだと、新聞その他のジャーナリズムでよく言われます。確かに都市の区域によっては、不用心その他の問題がありました。それから通勤に時間がかかります。若い退職者たちは、住むところが前の人たちよりもだんだん遠くなっています。

しかし私は、住宅条件の改善の方がもっとも大きかったように思います。老人のための対策、住宅費への補助、そしてほとんど無料で医療や家事の手伝いなどが在宅で行われるようになりました。それから比較的低所得の退職者たちは、公共の交通機関が無料で利用できます。退職者たちは昔よりも子供たちと離れて暮らしています。私たちの調査の結果では、若い退職者たちの方が子供たちの近くで暮らしています。若い退職者たちが郊外に暮らしていると、その子供たちもまた同じ郊外に暮らしています。そして老人たちは、車はある、足腰はしっかりしているということで、昔に比べてはるかに子供たちとの間の行き来ができるようになっています。

私の結論としては、若い退職者も年を取った退職者も、パリの生活というものを大事にし、評価しています。パリの都会的な住宅環境、お店があるとか、便利である、というような都会的な条件を

評価しているのです。

そして退職者たちは住んでいる地域に多くのものをもたらします。彼らの役割は、目には見えませんが、非常に重要なものです。お年寄りたちは街中をあちこち歩き回り、いろいろな結びつきをつくっていきます。世代間の結びつきも、地域間の結びつきもつくります。お年寄りのいない街というのは子供のいない街と同じように悲しいものだと思います。

これからも社会政策上、お年寄りを自分の家に、そして自分の地域にとどめるということがなされなければならないと思います。とかくジャーナリズムや政治家たちは、お年寄りを自分の家や地域にとどめておくには金がかかると申します。それは問題の立て方が悪いのです。我々の社会にはきちんとした人間的な社会をつくるだけの手段があるのです。今日の生活水準、生産水準というのはかつてないほど高くなっています。問題はどうも別のところにありそうです。要するに私がお役人に言っているのは、とにかくお年寄りの世話をするお役所に、能力のあるしっかりした立派な人を置くこと、人間が大事だということです。

―　拍手　―

司会（針生）

どうもありがとうございました。

今のお話、大変おもしろいお話で、フランスの退職者は生活水準が非常に向上していて、退職者の方が人生はよりよいものだと考えていて、人生は退職してから始まるのだと考えているというフランスの年寄りに対しての諸条件の水準の高さ、そしてまた年寄り自身がパリの生活を大事にしていて、愛しているというようなお話だったと思います。それでは東京はどうかということが次の問題になるわけですけれども、フランスと東京では歴史的条件も、経済効率主義とか老人に対する考え方も複雑にいろいろ違っていますから、一概に言えないと思いますけれども、若い人とか年寄りという区別なしに生活しているというのは、やはりパリの文化水準の高さというか老熟した文化水準というものがやはりあるようにおもいます。

パリに行ってもロンドンに行っても、街でマゴマゴしていると、私は老人だと見られるような年ですから、主婦の方が駆け寄ってきて、ケンブリッジ大学はどう行くのだとか、親切に教えてくれます。東京でマゴマゴしていると、学生がドーンとぶつかってきて、この年寄り何マゴマゴしているというようなもので、これはやはり人間に対する考え方とか市民社会の成熟度がずいぶん違うなと感じます。それだけ東京という社会はある意味では活気があり、また幕藩体制からいろいろな町人文化とか老人文化とか、独自の形で発展してきていることは確かで、どちらがいいとか悪いとかいうことは言えないわけですが、倉沢先生からお話を伺って、皆さんそれぞれにお考えをまとめられたらよろしいのではないかと思います。

どうもクリビエさん、また通訳の井田先生ありがとうございました。

―　拍手・了　―

続きまして都市研究センター所長の倉沢先生のご報告を伺います。都市研究センターというのは都立大学にありまして、現在研究機関誌の「総合都市研究」、あるいは土地問題や高齢化社会の問題などの研究をまとめた「都市研究叢書」を逐次刊行するなどして、都立大学の中心的なセンターとなって、将来独立大学院も設ける構想ももっております。「都市研究叢書」は日本評論社から出版されていまして、皆さんお買い求めになることができます。

倉沢先生は、そういう都市研究センターの所長をされて、また日本都市社会学の会長もされていまして、講師の紹介のところでも非常にユニークな発言をなさるというふうに書いてありますが、新しいスタイルのアカデミズムの代表ではないかと私は思っております。ひとつ先生のユニークなご報告をご清聴いただきたいと思います。

3. 東京の社会変動と高齢者のライフスタイル

倉沢　進

(1) 全体社会の高齢化と地域社会の高齢化

倉沢でございます。

クリビエ先生のお話がお目当てでお集まりだと思いますが、私の話も聞いてくださるそうで、どうもありがとうございます。ただし私の話はたぶん皆さんの期待をかなり裏切るのではないかと思います。というのは、高齢社会の問題というと、少なくとも新聞などに出てくる大きな問題点としては、まず第1に年金の問題です。以前は何人に1人で高齢者1人を養えばよかったけれども、これからはえらいことになるという種類の年金問題がまず第一の問題として取り上げられます。その次は介護、ケアの問題です。年を取って、体やさまざまな自由がきかなくなって、生活上のいろいろな問題が出てくる。この人たちのお世話をだれが、どうやってしたらいいか。施設に入れた方がいいのか、家でやったほうがいいのか、その人間はどうするのかというような種類の問題が第2に取り上げられると思います。大きく取り上げられるのはきまってこの二つの問題です。

そして3番目に出てくるのが、そうはいっても、お金があって、人が世話してくれても本人に元気がなかったらだめじゃないかということで、生きがい、お年寄りが何か自分に生きがいをもって生活できる条件は何かとか、あるいはお年寄り自身が若いころからその時代に備えて自分の趣味をもつとか、何か勉強するとかしてはどうかとか、生涯学習というのは高齢者だけの問題ではありませんけれども、社会的にはそういう機会をたくさんつくらなければいけない、というようなことが普通の高齢社会問題の論点です。

したがって皆さんは、今日はこの三つの問題についてかなり突っ込んだ話が聞けるのではないかという期待でお集まりだろうと思うのですが、私がこれから申し上げようというのは、3番目の問題にはいくらか関係しますが、最初の二つの問題についてはほとんど触れるつもりはありません。一般に見落とされているのではないかと思う問題、それは高齢社会の問題を都市の問題としてとらえるという視点であると思うのですが、そういう観点から話を申し上げたいと思います。

東京という社会が今日非常に大きく変化していることは皆さんご承知のとおりです。通りを歩いても、今クレーン車がとまっていて工事をしていないようなところは探す方が困難なぐらいです。あるいは地上げが行われて更地になっているところもあります。これはおそらく関東大震災前後の変動、あるいは第二次大戦の戦災による変動の規模を上回る規模で変化しているのではないかと思われます。そしてその中で高齢化が現に起きています。これをどういうふうに考えたらいいかということについてお話ししたいわけです。

高齢化ということを考える際には、フランスと日本とはどう違うかと、国を単位に議論をすることが多いです。その場合には、人口学的には閉鎖人口を問題にします。閉鎖人口というのは変な言葉ですが、その中で生まれたり死んだりする人、大体その中でおさまっているという範囲です。この場合日本というのはそれにほぼ相当します。パリへ勉強に行って、すてきなフランスの女性と結婚して向こうに居ついてしまったという人も少しはありますけれども、そういう例外を除くと、日本人は大体日本という国の中で生まれて死んでいくわけです。

その日本の人口を単位に高齢化ということを考えるとき、それは何によって変化するかというと、生まれる人の割合、出生率、それから死亡率などによって変化します。そしてみんなが長生きするようになると、日本の社会の高齢化が進んでいくこ

とになります。

これに対して地域の人口というのは、これとはかなり違った側面をもっています。つまりある特定の地域をとると、高齢化というのは何によって起きるのかというと、出生と死亡の差、自然増減によって起きるという側面も多少はありますが、もっと大きな変化をもたらすのは、よそに住んでいた人がそこへ移り住む、そこに住んでいた人が出ていくということ、つまり社会増減によって起きるわけです。

数年前に私は兵庫県のある町の方から、「先生一度うちの町へ来てくれませんか」とお誘いを受けました。どういうところですかと聞きましたら、近ごろめずらしいところですよ、市町村という区別でいくと町になるのだけれども、交通信号が一つもない、喫茶店が一軒もない、そういうところがいま日本にあると思いますかという話でした。それは珍しいというので、私は夏休みに家族を連れて行ってみました。兵庫県の山陰側の、山に入ったところの町でした。人口が以前は2万人いたのですが現在では半分の1万人に減っています。いわゆる過疎の山村ということになります。

お年寄りに話を聞きましたら、その村のお年寄りは以前は、小学校を卒業すると半年間出稼ぎに行っていた。灘の酒造りへ杜氏に行くか、さもなければ高野山のふもとへ出稼ぎに行ったものだと。高野豆腐という意味が私はそのときようやくわかったのですが、本当に高野山のふもとの気候が適しているのでそこでつくるのだそうです。結局その地域の中では、簡単に考えると2万人が食っていくだけの農業基盤がないわけです。1万人分しかない。しかし夏は米をつくったり、大豆をつくって味噌をつくったりする。冬になると、現金収入も必要だから出稼ぎに行くという生活をしていたわけです。

これが今は1万人に減った。1万人に減ると、どういう部分も平均的に減るということはないわけで、当然のことながら若者が出ていきます。したがって高齢化が大変進んだ形になります。例えば2万人の中にお年寄りが1000人いたとすると、それは高齢者が5％いたということになります。ところが1万人の若者が出ていってしまうと、今度は1万人の中の千人のお年寄りということになりますから、高齢者が10％ということになるということです。そういうことでここは高齢化が進行していたわけです。

こういうところで高齢化が進行すると具体的に何が起きるのか。いろいろなことが起きるわけですが、例えば若者が減るので冬の山道で雪かきをする人がいなくなる。雪かきをしないとバス会社が冬はバスを休むことになる。そうするとこれまで村にまだ残っていて、下の町へバスに乗って働きにいっていた人が下の町へ移ってしまう。お年寄りも困ります。病気になったときに病院に行こうと思ってもバスは動かないわけですから。したがって東京や大阪や下の町にいる子供のところへ引っ越そうか、あるいは老人ホームに入ろうかということになります。かたい言葉でいえば、地域社会の維持機能が衰えてしまったということになります。

ただしこの1万人の生活を見て、私は適正人口になったのではないかと思いました。2万人が住んでいたけれども稼ぎ分は1万人分しかない。だから冬は、元気な者はみんな出稼ぎに行くということでこの町は成り立っていたわけです。現在では1万人は都会に出てしまって、残りの1万人が生活をしていて、結構いい暮らしをしている。私は適正人口になっていい暮らしをしているのではないかと言ったのですが、土地の人々は大変に困るのだというわけです。人口ピラミッドが常識的なピラミッド型にならないで、若者がいなくなるわけです。そして将来が大変心配であるということです。

私はそのとき初めて交通信号がない、喫茶店がないという意味を了解できたのです。つまりお嫁さんが足りなくて困るのだけれども、お嫁さんの世話ができない。数少ないお嫁さん候補をだれかに世話してしまうと、残りのすべての男性からうらまれる。したがってうっかりお嫁さんの世話ができないのです。若者に聞いてみると、デートができないと言います。村に喫茶店も映画館もありませんので、下の町まで連れていかなくてはならない。ところが下の町へ行く道は1本道で家々はその

道に沿って建っていますから、バスに乗って、あるいはバスがなくなりますから車に乗って下の町の映画館か喫茶店に行こうと思うと、みんな見ているわけです。「先週の土曜日はあいつは花子ちゃんを連れて出かけて行ったが、今週は秋子ちゃんにかえた。はなはだけしからん」というようなことがみんな見えてしまいますので、うっかりデートもできない。ますます若者はいなくなるということで、これは大変な問題になるわけです。

東京と関係ないようなことを申し上げましたが、この出た人がどこへ行くかというと、東京や大阪に行くわけです。そしてこの東京が抱えている問題というのは、この村とある意味で基本的には逆の形で生じてくる問題です。私は東京の飯場型社会構造と言っているのですが、東京の人口ピラミッドというのはこんな形をしています。私はロシア教会のネギ坊主型と呼んでいますが、男女ともですが、特に男の若者が大量に入ってきます。したがって東京というのは若者が多くてお年寄りが少ない社会というとらえ方が一般的ですし、現にそうでした。

昭和35年の数字では、65歳以上の高齢者は全国で6％弱でした。しかし東京は3.8％でした。当時、高齢者の割合が一番高かった島根県が8.4％ですから、その半分以下だったわけです。したがって高齢化というのは東京の問題ではなくて、過疎地や山村の問題だというのが当時の一般的な理解でした。ある農業専門家にいたっては、お米の値段を高く維持するのは農業政策ではなくて、老人福祉問題である、なぜかというと、お年寄りは大体田舎にいて農業に関係しているから、米代価を上げればお年寄りに補助金を配ったのと同じことになると。少し極端な議論ですが、こういう議論が成り立つほど若者は都会に出て、お年寄りが田舎に残っていたというのが昭和35年の姿です。

現状の正確な数字はちょっとここにもってきていないのですが、東京が10％近くになっていると思います。そして紀元2000年の時点では、東京の高齢者の割合は15％を越えるだろうというのが現在の予測です。ただしその時点でも、全国では16％、島根県は二十数パーセントになると予測されていますので、東京はまだ高齢者の割合が低いのではないかという議論があります。そして大都市というのは若者がいて活力があるというのが普通の説明ですが、それについて実は問題があるのだということを後で少し申し上げたいと思います。

(2) 飯場型社会 ― 東京

東京は従来こういう若者を大勢抱え込んだ活力のある社会でした。しかし活力さえあれば世の中いいかというとそうではないということを言いたいのです。そこで飯場型社会という妙なことをわざわざ言っているのですが、若い方はあまりこういう言葉をご存知ないかもしれませんが、飯場というのは例えば石炭が見つかると、それ掘れというので労働力を集めます。労働者の住まい、今日でいえばプレハブ住宅のようなものをつくります。そのときのそこの人口構成を考えてみると、女の人や老人や子どもはまずほとんどいない、大部分が若い男です。飯場も何年かたつと、パチンコ屋ができたり一杯飲み屋ができたりします。そして女性も若干は入ってきます。もっとしばらくすると、洋服屋ができたり、郵便局ができたり、学校ができたりします。そうするとお年寄りも増してくるし、子どもも入ってくるし、男と女のバランスも少しずつよくなってきます。それがつまりは都市の成熟ということです。

東京をいきなり飯場と比べるのは大変乱暴な話ですけれども、飯場型ということでご理解いただきたいのですが、そういう意味での飯場のように、男が多くてお年寄りが少なく、若者が多く、子どもが若干少ないというのが東京の人口構成の基本形です。

普通高齢化のことが問題になるときには年齢構成が問題になりますが、男女別の構成をみても同じことが言えます。東京はひところ女100人に対して男が115人ぐらいいました。大した差ではないとお考えの方がいらっしゃると思いますが、これは男か女かを問う必要もないお年寄りや子どもを含めて100対115ですから、いわんやこれから結婚しようという若者の割合でとると、男は大変つらい立場に置かれるという状況が東京のスタイル

であったわけです。

念のため申しますと、西欧の都市はこういう型ではありません。パリの数字は記憶しておりませんが、フランスやイギリス、ヨーロッパやアメリカの大都市というのは、女性の方が男性よりもたくさんいる、日本とは正反対の形です。それから高齢者の割合も高い。これが西欧の都市の特色です。東京の場合はそうではなくて、男が多くて高齢者が少なくて若者が多い。つまり汗臭い働く場所である、飯場のような社会であったと言えると思います。

このことは東京の都市としてのさまざまな施設についても非常に大きな影響を与えているように思われます。象徴的な例だと思うので私はこの例をよく申し上げるのですが、昭和21年に東京都の都市計画課がある16㎜の映画をつくりました。「20年後の東京」という題の映画です。種をあかせば、これは戦災復興都市計画のPR映画ですが、東京が焼け野原になったことを千載一遇の好機と考えて、東京をいい街にしようという計画でした。太陽の街、緑の街、友愛の街に東京をしようとか、いろいろなことを言っているわけですが、その中で三つのことを約束しています。一つは東京の電柱と電線を全部地下に埋める、二つ目が、道路という道路に歩道をつける、三つ目が地下鉄を蜘蛛の巣のように張りめぐらすということです。これはまだ銀座線1本しかなかったときのことです。そしてこの映画の非常にユニークな点は、20年後にこの三つのことはどのくらいできている見込みであるかということを映画の中でちゃんと予測していることです。地下鉄を蜘蛛の巣のように掘ることはお金がかかり過ぎるので無理かもしれない。歩道は半分くらいまではできる見込みである。電線と電柱は全部地中に埋める見込みであるといっています。

それから45年ぐらいたちましたが、結果は皆さんご承知のとおりでして、地下鉄はパリにも負けないくらいたくさんできました。歩道はまあ半分くらいできたと考えてもいいでしょうか。そして電線と電柱が地中にあるのは皇居のまわりと馬喰町と赤坂一ツ木通りぐらい、ほんの点でしかありません。正反対になったわけです。

この理由についてはいろいろな考え方があると思いますが、私はこのように考えます。つまり東京というところは、みんなが出稼ぎにやってくる働く場所である。だから地下鉄はぜひ掘らなければならない。どんなにお金がかかっても掘らなければならない。現に地下鉄のルートを見ていただけばそれが非常によくわかります。郊外の住宅地から霞が関や丸の内へ、速く大量に大勢の人が通勤できるようにということで路線ができています。私は不思議に思うのですが、下町線などという環状地下鉄ではなくて、東西線という名前が非常に象徴的ですが、こちらの郊外から都心を突っ切って向こうへ抜けるという地下鉄ばかりができているわけです。そういうぐあいに地下鉄はどんどんできました。

電線と電柱はなぜ埋まらなかったのでしょうか。飯場と考えると、電線と電柱があってみっともないなどということはどうでもいい、稼げればいいわけです。せいぜい役に立つのは、見たところぐあいがいいとか、時代劇のロケをやるときにじゃまにならなくて助かるとか、しいていえば電柱がないと歩道が少し広くなって、車椅子の人間も杖をついたお年寄りもわりと安心して歩けるというくらいの実用価値しかない。だからこれは後回しということになったと思います。これは都庁だけの問題ではありません。都庁もそう考えたし、都民もそう考えたし、政府もそう考えたということであったと思います。そういう意味で、東京は飯場としてつくられ、飯場として運営してきたと言えるのではないかというのが私の理解です。

したがって基礎的な人口構成と都市のつくられ方との間には、ある意味である種の親和関係があるのではないかと思います。そのように考えると、東京という街がこれまで飯場としてつくられ、意識され、運営されてきた。だれの責任かという問題は別として、これはある意味で冷厳な事実として認めなければならないのではないかと思います。

これから申し上げたいことが二つほどあります。東京の高齢化は現状ではまだ少なくて済んでいると申しましたが、それはある種の正解でもあるし

誤解でもある面があるということを申し上げたいと思います。それはこういうことです。東京には全国の主要な大学がたくさん集まっています。地方から東京の大学へ入るために集まってくる学生は毎年18万人程度と推定されます。そしてその大学生が大学や大学院にたまるわけですから、東京の中には約100万の人間が学生というちょっと特殊な人口部分として入っています。これは基本的には18で歳やって来て、二十数歳のときにいなくなるわけです。

ひところ国土庁は東京の大学を全部外に移すという計画を立てました。この大学生による人口増加分が東京の人口増加分にほぼ相当する。したがって大学さえ東京になければ、東京の人口はこんなにふえないのだ。だから大学を外に移すのだという政策をとった時期があります。都立大学はその政策の影響を遅く受けて、来年4月に八王子に移るわけですが、東京都の中であることには変わりはありません。

ところが大学生が100万人いるということは、1000万人のうちの10％弱ということになりますから、東京の人口構成の中から大学生分を取り除いて高齢者の比率を計算し直すと、今より数パーセント計算上はあがることになります。ですから東京という社会を大学を取り除いた社会と考えると、決して高齢化と無縁な社会ではないということになります。そういう意味では、東京はすでに全国平均では高齢化が進行した社会であると言えないこともないということです。

そして最近ではこの人口の飯場型の構成が変化してきました。高齢者の割合が全国平均に追いつきつつあるということはすでに申しました。それから女性と男性の割合が、最近では大体101ぐらいになっています。女性100人に男性が101人です。これはもうほとんど問題にする数字ではなくなっています。つまり男女の割合という点ではほぼバランスがとれた、成熟した都市になりつつあるということです。

それから年令構成の上でもバランスが回復しつつあります。これは高度成長期であれば集団就職という形で若者が大量に街に入ってきた、その人口の流れがほぼとまったということに対応しているわけです。ですから学生は高度成長とはあまり関係なしにたくさんおりますので、この点をちょっと括弧のなかに入れてしまえば、東京は人口構成上かなり成熟化してきているということが言えると思います。

ところが東京の、ハードというか、かたい意味での街の構造というものを考えてみると、飯場型の名残がいたるところに残っています。例えばこの近所に新御茶ノ水という悪名の高い地下鉄の駅がありますが、下を見ただけでも卒倒しそうな長い階段があります。エスカレーターも最近はだんだんふえてきましたが、エレベーターのついた駅は今のところまだありません。こんな状況です。JRの駅は地下鉄よりももっとエスカレーターの設備が遅れていることは皆さんご承知のとおりです。つまり飯場であれば、そこにいるのは若い元気な働く人間ばかりですから、そんな階段ぐらい朝飯前でどんどん駆け上がったり、駆けおりたりすることができる。したがって東京という街は、お年寄りや障害者には非常に不親切な、そして若くて元気な人間にとっては大変都合のいい便利な都市をつくってきているわけです。

そこへいくと、パリやロンドンなどのような高齢化の先進社会であり、都市という生活様式を非常に長くもってきた国々では、もう少し親切です。したがって私どもは、ヨーロッパに比べて非常に早い期間で達成しつつあると言われている高齢化という基礎的な人口の動きと、それに対して非常に遅れた都市構造というものを何とかつり合わせるようにしなければいけないという問題があります。クリビエ先生のお話では、社会の変化に社会学は置いてきぼりをくっているということですから、そしてその社会学の成果が政策に反映されるのはもっと遅れることになるでしょうから、遅れるのがある意味で当然なのかもしれませんが、それに何とか追いつくことがこれからの問題になると考えられます。

(3)「にくらしいお年寄り」の社会

それでは追いつくためにどういうことが考えられ

るかということを、これからお話ししたいと思います。追いつき方ですが、私は一つ妙なことを申し上げておきたいと思います。高齢社会になるということは、原因はともかく必然であります。このことは問題はない。しかしそのできた高齢社会がいい高齢社会であるか悪い高齢社会であるかということは大きな問題であると思います。我々は悪い高齢社会を避けて、よい高齢社会に近づきたいわけですが、ではよい高齢社会というのはどんな社会かということです。

私はこう言っています。表現ががさつで申しわけないのですが、にくらしいお年寄りがちまたに満ち満ちている社会というものがあったとすると、それは大変いい高齢社会ではないか。かわいそうなお年寄りがちまたに満ちあふれている社会があったとすると、それはよくない高齢社会ということになるのではないか。

「にくらしい」というのは、私がもう少し上品な日本語がつかえるといいのですが、ある新聞記者にそう言いましたら、その新聞記者がまた私よりも一段とがさつな人間らしくて、新聞に載ったときには「にくたらしいお年寄り」と書いてあったのです。これはいくら何でもひどい。「にくらしい」という意味は、クリビエ先生の上品な言葉で言うと「第3の時代」ということになるわけです。退職はしたけれども結構元気だと。ただ私は年令だけのことを言っているわけではありません。結構年金もあるし、それなりの資産もあるし、若者はワンルームマンションしか入れないのに、結構な庭つきの住宅をもっているとか、資産ももっている。自分のやることをもっている、自分の趣味をもっている。

熊本県はゲートボールの発祥地の一つで、非常に盛んな県ですが、若者が非常に不満だそうです。それは何かというと、お年寄りがゲートボールに熱中してしまって孫の面倒を見てくれなくなったということです。したがって近ごろの若い共稼ぎの夫婦などは大変困っているそうですが、これも「にくらしいお年寄り」の一つの形態かもしれません。自分のやりたいものがあって一生懸命やっている。そしてそれなりの資産や、いろいろな力をもっている。

非常に多様です。みんながみんな同じというわけにはいきません。子供というのは、3歳児は3歳児で一括すれば大体同じです。しかし、高齢者というのは自分の人生をそれぞれに生きてきているわけですから、もっている人間的な資質も、自分の人生経験も、ものの考え方も、生活のスタイルも、健康も、ありとあらゆる面で多様ですから、一概に言えないのですが、この「にくらしいお年寄り」がいて、そしてそれぞれが自分の人生を自分のかけがえのない人生として生きている。どうもかなわないというように若者にみられるような、そういうお年寄りを「にくらしいお年寄り」と呼びたいわけですが、そういうお年寄りがちまたに満ち満ちているということになれば、これは東京も捨てたものではないということになろうかと思います。

そういう社会を実現するためにはどうしたらいいのか、2、3の問題点を考えてみたいと思います。一つは、つまりお年寄りが非常に多様化してきたということです。私は以前高齢者の施設を見て歩いたことがあります。そしてそこでショックを受けたことがあります。それは老人施設ですが、日課というと3回食事をすること、一回お風呂に入ること、1日1回寝ることしかないわけです。どこか公園へ行って植木の手入れをするとか何かすることはないのですかと言ったら、そんなことして風邪ひかれたら困るからじっとしていただいてますと言われて、この施設は大変悪い方の施設だったと思いますけれども、大変ショックを受けたことがあります。

お年寄りは一体何をしているのだろうとそのとき思いました。一人のお年寄りが俳句をつくるという趣味をおもちで、一生懸命つくっておられて、何とかの宮さんがおいでになったときにお目にかけて大変ほめられたとか。これは大変結構なことだと思いました。ほかの人はそれぐらいの趣味もないのだろうかと考えて、ハタと気がついたことはこういうことです。つまり九州でも後進地と呼ばれているようなところで、現在お年寄りでおられる方々、私が行ったのは10年前ですが、その当時

すでにお年寄りであった方々というのは、若いころはあしたに霜を踏んで出かけて、夜は星をいただいて帰るという生活をしておられたと思います。趣味だ何だということを今の人は説教して言いますけれども、そんなことのできないような人生を歩んでこられた方々ではないかと思ったわけです。

そこへいくと、パリは全国平均より15％生活水準が高いということでした。東京の生活水準がどのぐらい高いかという数字を私は今もっていませんけれども、少なくとも東京の人は地方の人より少し豊かな人生を送ってきたわけですし、いろいろな人がいるということが言えると思います。

ゲートボールという話を聞いただけでバカにする人が、たぶんこの中に半分以上いらっしゃるのではないかという気がするのですが、それはゲートボールぐらいしかすることがないのではないかというような気持ちをおもちの方が多いということではないかと思います。いろいろな人がいるということだと思います。

その多様化した高齢者の生活スタイルというものが支えられる仕組みが必要ではないかと思います。例えば現在自治体の行政が社会学よりももっと遅れていると思うことは、その多様化にあまり施策が追いついていないということです。「老人憩いの家」というのはたいてい座敷が二つか三つつながっていて、舞台があって、カラオケができて、囲碁と将棋ができて、お風呂があって、広い場所があればちょっと庭石が置いてあるというワンパターンでできておりますが、もっと違ったものではないだろうかと思います。

一例を挙げると、本郷に学士会館があります。あれは大正の大震災直後にできた施設と称していますが、当時の日本社会のエリートであった帝国大学卒業生がつくったクラブというのは、行ってみると、ビリヤードと囲碁、将棋があります。実はせがれがビリヤードを覚えたというので、あそこなら安かろうというので私は連れていったのですが、大正のモダンボーイとおぼしき立派な紳士たちが大変上品にビリヤードをしておられまして、ジーパンをはいたせがれを連れた私は大変恥ずかしい思いをしたわけですが、たぶん当時の日本社会のエリートがクラブをつくればビリヤードが必要だったのだろうと思います。同じ階層であっても20年後に学士会館ができていたらマージャン室ができていたのではないかと思います。さまざまな世代ごとのそして階層ごとの差異も大きいのです。

政策的にもう一つやられているのは、高齢化だ、そら生涯学習だということです。私は実は本当かなと思っているのです。今日お集まりの皆さんにこういうことを申し上げるのはおかしいのですが、年を取ってまで机に向かって座って話を聞いて、ノートをとるなどというのはかなわないというお年寄りの方が多いわけで、皆さんは例外かもしれません。にもかかわらず、社会政策というのは、生涯学習だから老人大学をつくれとか、社会教育の教室を充実しろとかいう話にたいていなっていますが、私の申し上げたいのはもう少し違ったエネルギーがあるのではないかということです。

(4) お年寄りの盛り場

ご存じの方も多いと思いますが、私が今ちょっと調べているのが巣鴨の地蔵通りという通りです。テレビなどでもいろいろ取り上げられて有名になっていますが、あそこは4の日になるとたくさんのお年寄りがお地蔵さんにお参りに集まってきます。大変賢い住職がお寺を移す時に、駅のすぐそばはいけない、駅からあまり遠くてもいけない、ちょうどいい距離のところにあのお寺を置いて「とげぬき地蔵」というありがたいお地蔵さんを置いたわけです。このお坊さんは社会学をよく勉強していたのではないかと思いますが、ハレの日の日常化ということを図ったのです。お地蔵さんの命日というのは24日が正しいのだそうです。ところが4の日は全部お地蔵様の命日にしてしまったのです。ですから1月に3回お年寄りが集まりますので、商店街も栄えた。そして人が集まるというのでテキ屋の人たちが、4の日になると縁日をやってくれるわけです。したがってお年寄りはお地蔵さんにお参りして気持ちがよくなった、家族の病気が治るようにお祈りすることができた、そこで買い物ができる、昔なつかしい縁日で金魚釣りもやろうと

思えばできるということで、大変たくさん集まってこられるわけです。

これは最近の非常におもしろい現象ではないかと思います。ある意味では困ったことだと思うのですが、ある意味ではすばらしいことだと思います。というのは、昔はお金持ちは銀座に行くが貧乏人は上野ぐらいが盛り場だったわけです。最近はそうではなくて、世代別に盛り場が構成されるようになりました。浅草に行くのは古い人、銀座に行くのは我々おじん。私は高いから行きませんが。それからもうちょっとということになると新宿、そして渋谷。

実は渋谷の盛り場の真ん中に都立大学の同窓会館があります。学士会館のような立派なものはつくれないものですから、マンションを一部屋買って、それが同窓会の部屋ということになっています。そこで碁会がありまして、昨日も言ったのですが私が一番若いくらいの数人が集まって碁を打つわけです。終わってから街へ出て、我々はこういうところにいるべきではないと思うのですが、とにかく若い人がどうしてこんなにたくさんいるのだろうかと思うぐらいたくさんいます。それから六本木とか原宿などということになると、大学生でももうおじんで恥ずかしくて歩けないというところもあるそうです。そのように東京の盛り場は階層文化から世代文化へと、階層よりも世代で盛り場が分かれたわけです。盛り場のセグメンテーションです。

お年寄りがセグメンテートされて、特定のところへ追い込まれるのはよくないことではないかという議論が一つあると思います。しかし、逆にいえば、若者は若者の楽しみがあり、お年寄りはお年寄りの楽しみがあるとすると、このようなお年寄りの集まる場所というものがあるということはすばらしいことではないかという気もします。皆さんお笑いになるかもしれませんけれども、あそこには新しいファッションがあります。モンスラとかモンラックスという言葉ができています。モンペ型スラックスを略すとモンスラもしくはモンラックスという名前になるのだそうですが、若い人が見ればどこが違って、どこがおしゃれなのかと思うのですけれども、しかしその年代の方々にとっては自分の個性を発揮できるファッションをそこで見つけることができる、そこで歩いていれば自分のファッションと他人のファッションを見比べることができる、そして自分のファッションをほかの人にみてもらうことができる、そういう場がある。これは大変すばらしいことだと思います。東京の街の中にこういうところがもっとたくさんいたるところにあればいいのかなという気がしています。

一昨年、台東区と目黒区の高齢者を対象に「ここ1年間に巣鴨のお地蔵様に行ったことがあるか」ということを調べたら、台東区で3割、目黒区で1割のお年寄りが行ったことがあるそうです。もしかすると東京の平均で2割ぐらいの方が行かれるということです。

買い物もそうです。近ごろのデパートで売らないものが売られています。若い方にはわからないけれども、ウグイスのふんなどというものが売られているわけです。司会をしてくださった針生教授のご親戚の方があそこで薬局を経営しておられまして、針生先生は半日薬局に座って何が売れるかということを観察されたのですが、平日はアリナミンとか当たり前の薬が売れて、4の日になるとウグイスのふんとかそういうものが出るそうです。あるいは毛糸の腰巻きとか、デパートでは手に入らないような品物が売られていて、そこに人々が集まるわけです。そこから新しいライフスタイルが生まれてくるという可能性があるのではないかと考えます。

生涯学習などという難しいことを言ってくれるな、だけど私は私なりに自分の生きがいを追求したいのだという人たちがいるということです。いま少しそこにお参りする習慣のある人たちの調査をしています。まだここのところはよくわかっていませんが、宗教とはあまり関係がないということははっきりしています。「へえっ、あのお寺曹洞宗なんですか、知らなかった」というような人がたくさん来られて、観音様を洗ってさしあげるそうですが、それをしないと気持ちが悪いと言われます。そういう意味では教派的ではないが一種の

宗教心なのかもしれません。さまざまなニーズがそこで満たされているわけです。

今その秘密を勉強中ですが、そういうことを考えてみると、そういうさまざまな生き方、例えば巣鴨に行けば楽しいというお年寄りも、ゲートボールをやっている時間が一番充実しているという方もいる。それから源氏物語の講座とかなんとかいう難しいところで勉強するのが楽しい、充実した時間がそこで初めて味わえるという方もいらっしゃいます。学士会館でビリヤードをするのが楽しいという方もおられます。いろいろな生き方が可能になってくるというのが大都市の一つの大きなメリットではないかと思います。

(5) 大都市の効用 —高齢者はどこに住むか

クリビエ先生も大都市の効用ということについてお話になりました。私はその点について、東京についての若干の補足を申し上げてみたいと思います。私は東京の社会地図というものをつくったことがあります。10年ほどかかって大変苦労してつくったのですが、その中でお年寄りは一体東京の中のどこに住んでいるかという地図をつくりましたが、皆さんはおわかりになるでしょうか。大ざっぱに考えて、お年寄りは都心にお住まいだとお考えでしょうか、それとも郊外にお住まいだとお考えでしょうか。先ほどのクリビエ先生のお話では、年をとったら郊外、特に水辺に移動するお年寄りが多いということでした。東京について実際に住んでいるところを調べてみると、実はお年寄りは都心に非常に多いのです。自然に接して郊外に暮らした方がいいのではないかと、私も最初は思ったのです。しかし実際に調べてみると、都心に住んでおられるわけです。

理由は二つあると思います。一つは、やむなくそうなっているという側面です。都心というのは人口が減っている地域です。東京の都心5区にはひところ200万人の人口がいましたが、現在は百万を割って、どんどん減り続けています。出るときに動くのは大体若者です。これは過疎の山村でも東京でも同じです。したがって若者が出てしまって、お年寄りが東京の都心に残っている。条件が違うけれども過疎の山村と似た形で残っているというふうにも言える側面があります。そういう意味では、やむなく残っている、あるいは都心の地価が高すぎて若者はとても住めないので出ていく。お年寄りの場合は自分の家を長年の蓄積でもっておられたり、もっていなくて借家の場合でも10年も借りていて、大家ともツーカーになっていて追い出されないで住んでいられるとか、いろいろな理由があって残っているという面が一つあります。

もう一つは都市生活の効用という側面です。東京という大都市はお年寄りにとって、特に都心部はある意味で非常に多くの便利な面を提供しているということが言えるといえます。一例を申し上げますと、私の大変身近なお年寄りが郊外に退職金で家を立てて住んでいました。何年かたって、ここはかなわないから都心に引っ越したいといって引っ越しました。引っ越した理由は二つあります。郊外の丘陵地の造成地に住んで、駅から坂道を上がって家に帰るのがつらいというのが一つです。もう一つは、年を取ってくると医療機関が非常に心配になる。新興の住宅地や信用のおける医療機関が見当たらないのが心配だということです。そこでこの夫婦は家を売って、都心近くのマンションを買って移りました。そてしそのことについては大変満足していたわけです。そして予期しないもう一つの幸せが降ってきたと言ってました。それは何かというと、人が訪ねてくるようになったということです。

先ほどのクリビエさんのお話では、郊外に移り住んでも、車に乗って移動ができるから子供に会いに行ったり来たりできるのでかまわないのだということでした。これは東京とパリの都市状況の違いを反映しているのかもしれませんが、高齢者になって、自分はこちらの郊外に住んでいるし、親戚や知人はむこうの郊外に住んでいるということになると、お互いに訪問するなどというのは一日ががりで、とてもではないけれどもかなわないということであったものが、都心近くのマンションにいると、昔の会社にやってきたとか歌舞伎座に来たからついでに寄ったとかで人が訪ねてきてくれる。人間関係が大変豊かになったということを

喜んでいました。

これは非常に考えさせられる指摘を含んでいるように思います。クリビエ先生のお話と少しくい違うのかなと思うのは、たぶんフランスの第3の年代のお年寄りと日本のお年寄りの行動様式に少し違いがあるからだろうという気持もしますが、人間関係を新しくする創出する力が非常に弱いということではないかと思います。我々の経験でいえば、小学生は転校してきたその日のうちに友達をつくって家に連れてきたり、遊びに行ったりできます。しかし年を取ってくるとだんだん気難しくなって、この人と話が合うかとかいろいろ難しいことを考えるようになるのでしょうが、結局新しい友達がつくれない。すると現在まで人生をかけて築いてきた人間関係をそのまま維持したいわけです。一番の不幸はその中の一人欠け、二人欠けて、次はおれの番かという時期がくるということですけれども、できたらそれをなるべく豊かなまま維持したいわけです。ところが郊外に行くとそれが維持できない、都心に帰るとある程度復活できたということです。この人間関係をどうやって活性化することができるか、そしてそれが可能な都市構造は何かということが私は非常に大きな問題であると思います。

東京のウォーターフロントに高齢者用の大きな高層のマンションをつくるという話が聞こえてきますが、私は首をかしげているのです。そこに単にお年寄りが集まったからといって新しい人間関係が創出できるのだろうか、今まで住んでおられたところに住んでもらう方がもっといいのではないだろうかというようなことを思うわけです。

私がそのことを考えさせられるきっかけになったのは、これは東京ではなくて広島ですけれども、例の原子爆弾が落ちたときに、小さな山があってその山影になったおかげで戦災を免れた地区があります。戦後は大変大勢の人が集まって、活気のある街でした。ところが最近は高齢化が進んで、若い人が出てしまってお年寄りが残っている。住宅環境が非常に悪い。そこで建設省が音頭をとって、いろいろな再開発の計画を出しています。ところが住民が反対しています。そこの再開発は建設省としては大変よく考えた再開発であって、そばに新しい住宅をつくってそこに移ってください、新しいのができたらまた戻ってずっと住み続けてもいいですよと。そういう点では大変よくできた計画であったのですが反対が強いのです。

なぜかというので私は見に行ってお年寄りの話を伺いました。すると自分はここで生きてきて、ここで暮らしてきていると、いろいろな思い出を語ってくれました。“柱の傷も何とかの”という種類の思い出がいろいろあるわけです。確かにそこは爆風の影響が残って家はかしいでいるし環境は悪いのですけれども、自分はここで死んでいきたいと言っておられるわけです。このお年寄りに、出ていきなさい、こちらの方がいい住宅でもっといい環境がありますよと、果たして言えるのだろうかと言うことを考えさせられた記憶があります。それを思い出して考えてみると、東京のように非常に変動の激しい社会のなかで、お年寄りがどこに住んだらいいかということは大きな問題であるし、なるべくなら人間関係を維持できる環境である必要があるのではないか。そしてそこを根拠地にして、今度はいくつかの盛り場があって、そこに行けば自分たちも人を見、人に見られ、何かそういう活動ができる場というものがある。このことがセットとしてあって初めて、東京は「にくらしいお年寄り」の満ちた住みよい構成社会が実現するのではないかと考えています。

(6) まとめと提言

最後におさらいを含んで若干の提言的なことを申し上げてみたいと思います。第1点は、高齢化社会ということになると生涯学習とか学習機会の提供というのはちょっと短絡的ではないか。そういう人もある、違う人もあるというふうに考えるべきではないか。むしろ教室に座って勉強するなどというのは苦手だけれども、しかし、何か社会参加を求めている、こういう庶民派の高齢者のライフスタイル、このエネルギー生かす工夫が必要だろう。盛り場型のストリートライフとでもいうのでしょうか、そういうものの展開を考える必要があるのではないかと思います。

もう一つは、地蔵通りなんて、モンスラなんて私は、という方もいらっしゃるわけですから、むしろこれらの高学歴社会—東京は典型的な意味の高学歴社会ですが—の多様な生活意識とライフスタイルに対応した仕組みというのが必要であるし、それは決してカルチャーセンターに全部吸収できるものではなくて、クラブ型と申しましょうか、先ほど学士会館のことを申し上げましたが、そういうものもあるだろう。

こうなってくると、一般的な処方戔はあり得ないということになります。例えばこんなのはどうだろうかと私が考えているのは、コミュニティー工房というアイデアをこの間ある方から示唆されたのですが、こういう広い部屋があって、住宅も手近にあって、そこでは焼き物を焼くこともできるし、踊りを踊ることもできるし、何でもできるという空間があって、そこがいろいろと多様な活動に使えるという仕組みを考えた方がいいのではないかということです。先ほど申し上げた「老人憩いの家」のワンパターンを打ち破るような対応が必要ではないか。内容については、行政が介入したり、我々が何か説教をするような性質のものではありません。何をやってもいいと思うのですが、そういう意味でいえば環境条件を整えることが必要になります。

3番目は、盛り場ストリートライフ型の社会参加の方にとっても、あるいは生涯学習型の方にとっても、どういうタイプの方にとってもそうですけれども、都市に、我々の東京という街に、高齢者も歩きやすい、動きやすい物的な構造というものがもっと必要になってくると思います。最初に申し上げた飯場型都市の構造からどうやって離脱するかということだと思います。まだまだこの辺は工夫の余地が非常に多いと思います。

東京都は数年前に福祉の街づくりという計画を打ち上げました。私も少しお手伝いしましたし、いいことだと思いますが、まだ中途半端だと思います。駅とか公共施設の入口の階段をスロープに変えようかとか、そういう仕方で高齢者も使えるようにしようという提案ですが、人間というのはなにも公共施設だけを使って生活しているわけではありません。デパート、ホテル、映画館等々そちらの方がはるかに多いわけですから、そういう全体がもう少し使いやすい都市構造に切り換えていくことが必要になるということです。

4番目はソフトの問題です。世代別のセグメンテーションと申しましたが、世代ごとに分けるということは、盛り場についてはこれはだれかが計画したわけでもなくて、ある意味で自然になったわけです。しかし行政の努力でもう少し工夫できる余地がたくさんあるだろうということです。

例えば、子供は児童館に行きなさい、若者は青年会館へ行きなさい、女の人は婦人会館へ行きなさい、お年寄りは老人憩いの家に行きなさいというのが今日の行政のサービスの仕方です。つまり高齢社会になるからお年寄りのために老人憩いの家をつくりましたという形にしたいのです。これは間違いだと思います。高齢者というのは、別に高齢者だけ閉じ込めれば幸せになるわけではない、子供の遊び声も聞こえた方がいいということがあると思います。

私の紹介の中に「コミュニティーセントウの提言者」と書いていただいていますがこれはコミュニティーセンターという名前の冷たい四角い箱をたくさんつくるのはいいかげんにやめにして、銭湯という庶民に長い間親しまれてきた場を住民のコミュニケーションの場に切り換えたらどうか、生かす工夫をしたらどうかという提言をしています。残念ながらこれは男女の交流の場としてはちょっと不適切な状況をもっていまして、老若男女といかないのが欠点ですが、老いも若きも交流ができる。子供のころのことを思い出しても、子供のことですから熱いお湯はかなわないというので水でジャージャーうめていると、近所のおじさんにどやされて、おまえだけが入る風呂じゃねえぞと言われて、そして社会生活のルールを身につける。世の中には自分たちと同じではない、違った人もたくさんいるのだということを教えられる。お年寄りのいわば生活経験を継承するという場でもあった。これを今日の社会で生かすべきではないかということを提言したわけですけれども、そういうことを含めて高齢者自身が自分たちの文化が創造

できる環境をつくっていかなければならないし、そしてそれを我々次の世代が継承するというか教えてもらうというのか、学習していく。

それから申し落としましたが、もう一つ私は考えていることがあります。それについては私は人に話を申し上げるような資格は何一つなくて、これから自分で考えていかなければいけないと思っているのですが、今はお年寄りが生きていることを条件にした議論だけが行われていますが、やはり最後は人間は何といっても死ぬわけです。そしてどうしたら心地よく死ねるかということが人生の一番最後の大きな課題であると思いますが、残念ながらこの問題についての答えを用意している学問はほとんどないと思います。

そして私は個人的にはこのように考えています。すべての宗教はその問題をクリアするためにつくられてきたものであると思いますが、しかし、今日の私どもはそのどれかの既成の宗教で安心立命を得て死んでいけるというものではなくなってきていると思います。一昨日クリビエ先生に伺ったことですが、今フランス人で教会に行く人は10％しかいないということです。日本人はもっと少ない。そういうことを考えてみると、私たちは死に直面したときにどうしたらましな死に方ができるかという問題を抱えているわけです。そしてこれは年金をいくらもらっても、介護をいくらされてもだめだと思います。何とかそれに対応することを個人的に考えなければいけないけれども、しかしいわばその基礎的な力、エネルギーを与えてくれるのはやはりにくらしいお年寄りとして生きてきた人生の経験ではないかと、私は思っています。そういう意味で、最後の問題に対しての答えというのはない。

しかしそれに対して一人ひとりが雄々しく直面できる条件をつくるためには、やはりにくらしいお年寄りとして充実したある一時期を過ごすことが必要な条件ではないかと私は考えています。これはもっと違った学問であったり、違った哲学であったり、思想であったり、宗教であったりするものが答えを与えてくれるのかもしれませんが、少なくとも社会よりは大変遅れています社会学者としては、ここまでしか申し上げることができません。

少しクリビエ先生のお話と関係をつけようなどという無理な努力をしたためということも含めまして、あっちへ行ったりこっちへ行ったりしてまとまりのないお話を申しましたけれども、いま考えていることを申し上げました。

先ほど、針生先生からもご紹介がありましたが、都市研究センターはこれで3年目が終わろうとしていますが、私が今日申し上げたようなことを含めて大都市高齢社会の問題についての勉強をしています。そして成果を本にしてお目にかけるのは、いま勉強中ですのでもう一両年かかると思いますが、お集まりの皆さんは非常に関心をおもちの方だと思いますので、こういうことはやっているかとか、こういうことをしてはどうかということがありましたら、都市研究センターの方へ手紙でもちょうだいできれば幸いだと考えています。

私の話はこれで終わりにさせていただきます。

―　拍手・了　―

司会（針生）

これで報告は終わりですが、倉沢先生は非常にユニークな発言をなさるというふうに最初にご紹介申し上げましたとおり、今の先生のお話は、盛り場のストリートライフ、コミュニティーセンターではなくてコミュニティーセントウのお話でしたが、私は今のお話の中に有りましたように、なぜお年寄りがとげぬき地蔵に行くのかなと思って、あすこの売場に座っていましたら、クラブ乳液なんていうのを売ったのですが、クラブ乳液などというのは40、50年以上前に見たことがあると思ったのですが、私のいとこの女性があそこで薬剤師でやっておりまして、その説明をするのですね。今はスーパーにいっても、クラブ乳液の効用を長々10分も説明するなんていう売り方をするひとはいないのですが、するのですね。それから前回買いにきたときは娘は結婚する前でどうしてこうしてとか、自分の話を向こうは20分ぐらいするのです。するとあそこはタワシの売場に行っても、どこの売場に行っても、売り手と買い手の話し合いがあ

－るのです。だからなるほどお年寄りがおいでになるのかなというふうに思ったのです。

高齢化社会の問題は福祉学の問題でもありますし、それだけではなくて社会学、地理学、歴史学の問題でもあります。それから法律学の問題としては養護機関の設置とか、あるいは福祉全体を東京都はどうやっていくのかというガーディアン・システムをつくらなければならないとか、あるいは福祉公社というのはもうどこでもやっている制度になりましたが、いろいろ新しい制度を考えなければいけません。今は高齢化社会の不安と不満は非常に渦巻いて、政策的な重要課題となり、都知事選挙などでもおそらく突出した課題になると思うのです。しかしこれを研究するにはなかなか総合科学として非常に範囲が広く、また東京都を老人型に改造するということになるといろいろ工学的にも非常に専門的な研究を必要として、そういう点が追いついていないのですね。そこに都市研究センターの存在価値があります。

今日はアカデミックなご報告をクリビエさんと倉沢教授から伺ったわけですが、長時間にもかかわらずご清聴いただきまして、都市研究センターとして厚く皆様に御礼を申し上げます。どうもありがとうございました。

— 拍手・了 —